

のである。

(四) 訳経經典

最後に両者の業績の最もたる仏典の翻訳活動のうち、仏教の受容の立場から、それぞれの訳経經典のうち一經典づつをみてみることにする。まず訳経数の多い支謙のものうち『太子瑞應本起経』に注目する。この『太子瑞應本起経』は康孟祥の出したものとやや異り、陳郡の謝繡、呉郡の張洗等が筆受し、魏の東阿王植が評定したものである。本経は仏教が中国に伝来し受容されるにあたり、最も効果があり、影響の大きかった翻經典で、後漢の建安二(一九七)年に竺大力と康孟祥の共訳の『修行本起経』の同本異訳の積尊伝である。その他、『弘明集』巻第一の「牟子理惑論」、西晋の竺法護訳の『普曜経』、西晋の耳道真訳の『異出菩薩本起経』、劉宋の求那跋陀羅訳の『過去現在因果経』、劉宋の宝雲訳の『仏本行経』等の仏伝類が支謙の時代前後に数多く翻訳されている。しかし、支謙のような人物、すなわち中国語はもろろん胡語にまで通じ、呉王朝と密接な関係をもった仏教者が積尊伝を改変したことはまことに大きな意義が認められる。『般若経』のように哲学的・教理的に深い仏典とは異り、仏教教理を深く理解できない一般の人人にとつて、仏教の始祖である積尊については最も関心の深いものであり、しかもその伝記となれば知識の必要性もあまりなく、聞いて伝える域で充分と思われるからである。

康僧会の訳経の主と思われる『六度集経』についても、また同様のことが言える。本経は仏教説話であるジャータカすなわち前生話である。総計九十一のジャータカが六度(六波羅密)の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の各々に配当し集められているところから、『六度集経』といわれ、巻第一の「普施商主本生」は劉宋の求那跋陀羅訳『大意経』巻第二の『須大掣経』は西晋の聖堅訳『太子須大掣経』、巻第四の『太子墓魄経』は安世高訳『太子墓魄経』、西晋の竺法護訳『太子墓魄経』、巻五の「賤道士本生」は西晋失訳『菩薩賤子経』、西晋の聖堅訳『賤子経』、巻第六の「修凡鹿王本生」は呉の支謙訳の『九色鹿経』に各々相当する。このように、積尊の前生話は、先に述べた積尊伝と同様で、康僧会もその任をになつたことは注目すべきである。

以上、支謙と康僧会は両者とも帰化人で呉都建業で訳経活動、仏教宣布活動を行なつたのであるが、北より南し、優婆塞として呉朝の庇護を蒙つた支謙と、南から北し、沙門として呉朝より警戒の目でいらされた康僧会とは、その手段方法はまったく対照的である。しかし呉を代表する両者について、今後その訳経面から中国に於ける仏教の受容を見ていく必要がある。

註①『出三蔵記集』巻第十三支謙伝(大正五五・九七b~c)

- ② 『出三蔵記集』巻第十三康僧会伝(大正五五・九六b)
- ③ 『出三蔵記集』巻第八支敏度の「合維摩詰序」(大正五五・五八b)
- ④ 註①に同じ
- ⑤ 註①に同じ
- ⑥ 註②に同じ
- ⑦ 『安般守意経序』(大正十五・一六三b~c)
- ⑧ 註①に同じ
- ⑨ 『高僧伝』巻第一康僧会伝(大正五〇・三二五b~三二六b)

アジャセ異名考

松永知海

一

アジャセの異名を漢字訳仏典のなかで整理してみるとつぎの三種に分けられる。

- ① 阿闍世
- ② 善見
- ③ 婆羅留支

①の漢字訳は梵語になおすと Ajatasaru であり、バリーでは Ajatasaru であり最も多くの文献にでてくる名前である。Ajatasaru は a-jata-saru に分解される。a は接頭辞で否定の意味を表わす。jata は4種動詞為巴の√janに ta がついて過去受動分詞となり「生まれる」という意味である。saru は男性名詞であつて、「怨敵・仇敵」の意味を表わす。故に名前をつけた本来の意図は「敵を生まない」という意味で、敵を生まないほど強い人ということにあつたと考えられる。

②の訳を梵語になおすと Sutarana である。この語は「よい」という意味を持つ接頭辞 su と、中性名詞で「見る」と「訳される darsana とに分解される。そこで「よく見ること」という意味から善見と訳される。この名前の使用例は、北本『大般涅槃経』第三十四とターラナータの『印度仏教史』などに見られる。

③の婆羅留支という語がどのような梵語の訳であるかは、不明である。というのも、漢字訳において婆羅留支と訳されるところを原典にあたると Ajatasaru であつて、そこからこの訳はできない。ところでこの訳は北本『大般涅槃経』第三十四に善見太子復作是言。国人云何罵辱於我。提婆達言。国人罵汝為未生怨。善見復言。

何故名我為未生怨誰作此名。提婆達言。汝未生時一切相師皆作是言。是兒生已當殺其父。是故外人皆悉号汝為未生怨。一切内人護汝心故謂為善見。韋提希夫人聞是語已。既生汝身於高樓上棄之於地壞汝一指。以是因緣人復号汝為婆羅留支。^④

とあることから、後世において折指因縁をもつて婆羅留支を解釈するようになった。

二

では婆羅留支はどのような原語を訳したのであろうか。またそれは折指とどのような関係があるのであろうか。

このことに関して慧琳は『一切経音義』のなか「大般涅槃經第三十四卷」の項に、

婆羅留支 古音云此名勝樂
音五者反亦名折指

と記している。このように婆羅留支が音訳であって、勝樂が意識であるということ、は、『翻梵語』にも「大般涅槃經」の項にあって、

婆羅留支 訳曰婆羅留者勝樂
枝者樂(午教反)

と記されている。近年では『印度固有名詞辞典』に、

〔異名：婆羅留支 Balaruci, 折指〕

とあり、Balaruci であるとす。

また『五分律』では王位の即位前を衆樂太子と呼び、即位後を阿闍世と呼ぶが、その部分にあたる『国訳一切経』律部一にはその註においてつぎのように推定している。

ここに衆樂とせるは勝樂・即ち婆羅留支 (Paraluci) なる語を訳せるものと考へられる。^⑤

また『大般涅槃經』三十四の記事の『国訳一切経』には註において Varuci と記している。

以上原語を記する三つの説がでてきた。そこで衆樂・勝樂と漢字訳される原語を検討してみよう。

Balaruci は bala と ruci とに分けられる。モニエルによると bala は young, childish, newly risen, early (as the sun or its rays), ignorant, foolish などである。これは漢字訳される。男性名詞では a child, boy (esp. one under 5 years) などである。これは漢字訳される。幼稚・禪小・愚めるいは童子・愚人となる。ruci はモニエルではないが、ruc は to make Pleasant, to be Pleasant という意味がある。『梵和大辞典』には ruci という女性名詞があつて、樂・喜樂と漢字訳されている。以上のことから Balaruci は「子供の楽しみ」という意味になる。ところでこの意味から、衆樂・勝

樂などの訳にはならないから他に原語を求めなければならない。

つぎに Varuci を検討してみよう。これも Para と ruci とに分かれる。ruci はすでに衆と漢字訳されることがわかったから Para を『梵和大辞典』によつてみると勝・最勝という訳がある。またモニエルには select, best の訳があり、勝樂と漢字訳されてもよい。しかし衆樂とは訳せないからやはり他に原語を求めるべきであろう。

ではつぎに Paraluci を検討してみよう。これも Para と luci とに分かれる。まず Para に衆あるいは勝の意があるかどうかみてみよう。『梵和大辞典』によれば勝という漢字訳例はあるが、衆という訳例はない。しかし極・極多という訳例があり、モニエルによつても Best のほかに exceeding (in number), more than という意味があるから Para は勝あるいは衆と漢字訳されてもよいことになる。ところで luci という語については披見した辞書に見いだせなかった。

以上の検討の結果、婆羅留支の原語は Paraluci であると推定する。^⑥

三

ところで婆羅留支が Paraluci の音訳と考えると、折指の因縁とはどのような関係があるのであろうか。少なくとも『大般涅槃經』にいう「以是因縁」という説明では両者をつぎつけることはできない。

そこでつぎのように推量してみた。第一に『五分律』であきらかなように、衆樂はアジャセの王位につく以前の名、つまり幼名と考えられる。第二に『十誦律』第三十六、『有部破僧事』第十七にはアジャセ自身が記憶にない幼い頃、指にできものができたという話がある。この第一と第二の話とからつぎのように考える。アジャセが衆樂といわれた幼い頃、指をわずらい、外見からわかるほど指が損傷していた。だから婆羅留支 (衆樂) とは直接関係ないが、そのように呼ばれていた頃に指を損傷していたので、未生怨説話と結びつき、『大般涅槃經』の因縁となつたのではなからうか。

註① 『大正藏』十二卷五六五頁下。

② 『ターラナータ印度仏教史』寺本婉雅訳註二二頁。

③ 註①に同じ。

④ 『妙法蓮華經文句』卷第二之下

阿闍世者未生怨。或呼為婆羅留支。此云無指。内人將護呼為善見。善見之名本也。無指之称表逆也。

『妙法蓮華經文句記』第二之下湛然(四三四・一八八上)
言「未生怨者母懷之日已常有惡心於餅沙王。未生已惡故因為名。無指

者。初生相者云凶。王令_レ升_レ樓撲_レ之不死。但損_二一指故

⑤ 『大正藏』五四卷四七九頁下。

⑥ 『大正藏』五四卷九九四頁中。

⑦ 一〇頁左。

⑧ 五八頁註⑦

⑨ 涅槃部二・二六八頁註⑬。

⑩ 七二八頁右

⑪ 『梵和大辭典』一〇卷九二二頁左。

⑫ 八八二頁左

⑬ 一二卷一一三〇頁左。

⑭ 一二卷一一七三頁右。

⑮ 九二二頁左。

⑯ 八卷七三五頁右。

⑰ 五八六頁左。

⑱ 波羅留支の原語について *valaraja* と推量する説(定方晟著『アジャセのすくい』二四三頁)があるが、仏教經典音義資料については全く検討されていない。

⑲ 善導によれば小指という。(因三七・二五三下)。

なお、仏典に説かれるアジャセ説話については拙稿「アジャセについて」(『仏教論叢』二三号)参照。

『佛敎大学仏敎文化研究所年報』第三号目次(昭和六十年三月刊)

○『浄土三部経大意』の撰述者に関する諸問題

——特に五種類の写刊本を比較して——

佛敎大学教授 坪井俊映

○附『三部経大意』の全文比較対照

○〔資料紹介〕

武田科学振興財団杏雨書屋積砂版大蔵経 無量寿経巻下

○佛敎大学仏敎文化研究所規程

○彙報

○編集後記

昭和五十八年度

仏敎文化研究所研究発表会題目一覧

- 第一回 九月二十八日(水)午後一時より 於本館小会議室
 本庄 良文助手 シヤマタデーヴァ俱舎論註について
 深貝 慈孝研究員 醍醐本法然上人伝記について——御臨終日記を中心に——
- 第二回 十月三十一日(月)午後一時より 於本館小会議室
 勝木 太一助手 仏敎経済学試論——経済行動の認識論的解明——
 明山 安雄研究員 法然上人門下の伝戒論
- 第三回 十一月二十八日(月)午後三時より 於本館中会議室
 妹尾 匡海助手 日本における補陀洛信仰について
 小野田俊蔵研究員 『阿弥陀鼓音聲王陀羅尼経』に基づく西藏曼陀羅について
- 第四回 十二月十九日(月)午後一時より 於本館中会議室
 東 直澄助手 *Sundaranda* における動詞の過去時制
 佐藤 健研究員 道綽禪師の浄土観——『境次相接』の意味するところ——
- 第五回 一月三十日(月)午後一時より 於本館大会議室
 藤井 照之助手 「義楚六帖」について
 前川 重綱助手 中論の研究——*the satya* について——
 田中 典彦研究員 チャラカ サンヒターに見るバイシエンシカの思想
- 第六回 三月六日(火)午後一時より 於本館中会議室
 明石 和成助手 『卒都婆辨』再考
 榊田 善夫助手 説一切有部の一特相について
 久下 陞研究員 果報と華報——「観心略要集」から「往生要集」へ——
- 第七回 三月二十九日(木)午後一時より 於本館中会議室
 神谷 静治助手 経量部学説ノート補遺
 稲岡 誓純助手 呉の支謙について
 真田 康道研究員 菩薩道における無我について